

議事録（平成 29 年度第 1 回 糸魚川市総合教育会議）

日	平成 29 年 8 月 7 日(月)	時間	14:00～16:00	場所	糸魚川市役所 201・202 会議室
件名	議事 (1) 学力向上の取組みについて (2) 不登校対策について				
出席者	【出席者】 13 人 市長 米田 徹 教育委員会 田原秀夫（教育長） 佐藤英尊（教育長職務代理者） 永野雅美（教育委員） 楠田昌樹（教育委員） 鷹本修一（教育委員） （事務局） 総務部 金子裕彦（総務部長） 教育委員会 佐々木繁雄（教育次長・こども課長） 山本 修（こども教育課長） 磯野 豊（こども課長補佐） 松村伸一（こども教育課長補佐） 田原早苗（こども教育課こども教育係長） 田沢小学校 松澤 隆（校長）				
	傍聴者定員	10 人		傍聴者数	2 人

会議要旨

1 開会（14:00）

2 市長あいさつ

本日はご多用の中、平成 29 年度第 1 回の総合教育会議にご出席いただき感謝申し上げます。教育委員の皆様方には、日頃から市政の推進、とりわけ教育行政の推進に特段のご尽力、お力添えいただきお礼申し上げます。

はじめに、昨年 12 月 22 日に発生した糸魚川駅北大火においては、皆様方からご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

現在、復興まちづくり計画を策定中だが、今月中に最終段階を迎える予定となっている。今後は、事業の実施に移っていくが、被災された皆さんに寄り添いながら、被災地の早期復興に全力で取り組んでいくので、引き続き皆様方からもお力添えを賜りたい。

さて、本日の会議は、前回同様、学力向上の取組みと不登校対策を議題としており、どちらも糸魚川市の教育の最重要課題であり、特に不登校対策は喫緊の課題である。

委員の皆様と活発な意見交換ができればと思っているので、限られた時間ではあるが、委員の皆様には積極的なご意見、ご提言をお願い申し上げ開会のあいさつとさせていただきます。

3 議事 ※進行 米田市長

(1) 学力向上の取組みについて

資料No. 1、資料No. 2 により事務局が説明

○教育長職務代理者

中学 1 年と中学 2 年の間に歴然とした違いが表れている。

中学校全体の平均値を 1 年生が高めている。学年を追うと、3 年間でこれほどの落ち込みが生じている。学力の一貫性から考えた時に、ここに大きな問題があるのではないか。

これは今始まったことではない。この差を埋めることができれば違った展開ができる。

○委員

話しを小学校の取組みからスタートし中学校に持っていけば、情報交換として価値があると思う。

市全体のNRT結果、田沢小学校の取組みから、私は陰山メソッドの手法は効果を上げていると捉えたい。

実際の数値、校長が示したグラフを見ても、反復練習が子どもたちの気持ち、やればできる、今まで遅かったが早くできるようになったという学ぶ意欲という基本的なところに効果が表れている。反復練習はウォーミングアップであり、本格的な教科に入る前の基礎トレーニングであることからすると、反復練習の継続により、伸びてくる子どもが増えてくることを期待したい。

陰山メソッドで大切なのは、タイム、継続性、まず計算、音読、暗唱が核であり、取り組んだ成果を確認しながら、徐々に指名なし発言、食育に広げていけば、さらに効果が出てくると思っている。

課題は、学校によって取組みの温度差があるということだと思う。中学校区単位で小学校の取組みを情報共有し、同じレベル、同じ歩みで取り組むと効果がさらに高まってくるものと思う。

温度に差があるままの中学校への移行は、中1ギャップを生む要因になっていないか。一貫教育を主張していることから、滑らかな移行ということも踏まえて、市内一斉に取り組む意味を各学校はしっかり受け止めて取り組むべきである。

○市長

取組みに差があるようでは、子どもたちにとってマイナスであり、急いで手を打たなければならない。

○委員

田沢小学校は朝学習の時間を利用して取り組んでいるが、学校によっては算数の授業の最初に百ます計算に取り組むところもある。そういった温度差をなくし、中学校区単位でもいいので同じ方法で取り組むことが必要である。

○市長

どちらの方法がよいのか、モデル校としてデータはないか。

○委員

モデル校としてデータがあると思うので、データを広げ、共有すると、他の学校の参考になる。

○事務局

学校により、取組みの差が出てきているのは事実である。昨年取り組むときに、陰山先生は、学校ぐるみの取組みで成果が上がる、校長の理解が大切であることを話されていた。

陰山メソッドについて、効果も含めて疑心暗鬼になっている校長もいる。取り組まないわけではないが、陰山メソッドでは学校の課題解決につながらないと思っている校長もいることは事実である。

しかし、田沢小学校の取組みを校長会等で情報共有し、校長からやる気になってもらえるようにしていきたい。

○教育長職務代理者

校長に温度差があるとすれば、職員のなかにもある。学校として実績をあげていく上で最大のネックになる。

意欲の面だけでも同じスタートラインに立たないと、モデル校がいくつできてても難しい話だと思う。

陰山メソッドの実践は、長い間、学校現場から消えていた部分である。思考力を伸ばす、原理原則的な理解を深めることに力点が置かれ、その間、繰り返し、記憶といったことは家庭に任された。

学校教育は時間的に取り上げることができなかったが、本市として、学校教育において、基礎的な陰山メソッドに取り組もうとしている。

そういった事情も踏まえて校長、教員に理解してもらい、スタートラインに立ってもらわないと、せっかくの良い機会を子どもたちに与えられなくなってしまふ。

実績をあげることは大切であり、そのためにカリキュラムの一部が削られてしまうことがないようにしなければならない。

○市長

一つの方向性がわかってきたのではないか。だとすれば、徹底して進んでいく方策はなにか、改善点等も踏まえて全校で取り組む必要がある。

○委員

陰山先生の授業を最初から見ているが、田沢小学校の児童が、最初と今では顔つきが違っているのがわかる。それだけでも成果だと感じる。

タイムの早い遅いはあるが、取り組むだけで生き生きとした顔になっていることから、陰山メソッドを信じて一丸となって取り組むことが大切である。

学校訪問等で、学校の温度差を感じており、温度差を埋めてあげないと子どもたちがかわいそうである。

今は、教職員の気持ちを揃えることが大切だと感じる。

○教育長職務代理者

現場で陰山メソッドを徹底的に勉強することが大切である。個人の判断で良い悪いを決め、気持ちにバラつきがある学校は効果が上がらない。

なぜ陰山メソッドに取り組むのか職員全員で共通理解を図らないといけない。

そのための施策も必要である。

○委員

成果の手法として、タイムのグラフ化も大切だが、他の学習への集中度、取り組む姿勢に変化はないか、子どもたちの意欲、保護者の反応も含めて、評価項目を決め多面的に評価をしてほしい。

田沢小学校では今後どこを充実させようとしているか聞かせてほしい。

○事務局

強調週間を設け、少なくとも2週間、同じ問題に取り組みタイムを上げるといった、歯車をさらに加速させる取り組みをし、子どもも教員もタイムが上がることを実感することをやってみたい。

○市長

教員はある程度の経験があり、自信をもって教育している。その教員に陰山メソッドの大切さをどう伝えていくのか、どう理解してもらおうのかが大切である。

そのためには、陰山メソッドの評価、成果を共通認識となるような基準をつくり、あてはめ、理解してもらおうほうがよい。

○委員

資料No.1の1ページのグラフについて、平成27年度の2年生は、学年が上がるごとに偏差値も上がっている。授業内容が難しくなってくるため、横ばいでもいいと思うが、上がっていることは成果の一つである。そういった追跡的な視点も必要である。

○市長

そのデータは示せるか。

○教育長

グラフは学年ごとだが、人(児童)単位に作りかえることは可能である。

○委員

最初に話しのあった小学校から中学校へのつながりについて、当市の学力向上にとって大きな課題であると思う。

中学校について、どう分析しているか。

○事務局

中学校では、家庭学習の時間が全国平均と比べ、大きく下回っている。

また、宿題はするが、予習復習をしない、自主的な学習をしない生徒が多い。

○委員

青海中学校単位で、小学校、中学校の連続性をどのように議論しているか

○事務局

家庭学習について、小学校は宿題のほかにメニューを示し、自分にあった自主学習に取り組んでいる。

中学校になると、宿題が終わった後、意欲的に目的意識をもって家庭学習に取り組む方向へもっていかなければならないが、小学校の牧歌的な家庭学習が、鋭角的な家庭学習に変わっていかない。

これは、小学校、中学校双方に責任があり、小学校のうちに、プリント、テストをしっかり綴じて、間違ったところを徹底的に学習するというやり方をメニューに積極的に取り入れ、奨励していかないと、中学校にいつてなかなか変わるものではない。逆に中学校にいつて牧歌的な家庭学習をしても成果が見えず長続きしない。

○教育長職務代理者

八王子式分方小学校の清水校長の言う、自分のためよりも人のためにとという視点が学習意欲やキャリアに影響するのではないか。道徳が教科化されるので、大いに期待したい。

○教育長

陰山メソッドの取組みを昨年3校でモデル的に実施し、本年度は全校で取り入れている。

全ての子どもたちが同じ環境でできることが望ましいが、今は学校にあった方法で取り組んでいるのが現状である。

数値的な成果を評価の一つとして見ていただいているが、陰山メソッドにより、自立した学習ができることが目標だと思っている。そのために、学習以外の評価をしていきたい。

集中すること、反復することが習慣化につながり、習慣化が家庭学習への意欲につながると思っている。

学習への意欲をつけて中学校に送り出すことが小学校の役割であり、連携をどうやっていくのか、陰山メソッドをさらに展開させた取組みが必要だと感じている。

そのために中学校区全体での取組みが重要であり、学校にお願いしていきたい。

○委員

小学校6年時に中学校を見据えた予習復習の大切さ、家庭学習の取り組み方を徹底することが必要である。

もう一つは、小学校では陰山メソッドに取り組んでいるが、中学校での繰り返し、反復練習も必要であり、陰山メソッドの中学版を模索して取り組むことはできないか。

○事務局

陰山先生と話しをしてみたいと思う。基本的には、中学校でも同じものでも構わないと思っている。

○委員

陰山先生と話したことがあり、基本は同じであり、中学、高校でも同じことに取り組めばよいとのことであった。

○市長

中1ギャップありきの話しをよく聞いていたが、今回、中学校での家庭学習につながるよう小学校で取り組もうという話しを聞いてよかった。

ジオパークと同様で、陰山メソッドをどう使っていくか、子どもたちのためにどう展開するかを考えてもらうことが大切である。

成果も出ている中で、毎年評価を繰り返すことにより、さらにバージョンアップしていくことをシステム化していってほしい。

○委員

中には陰山メソッドに否定的な教員もいると思うが、教職員が一丸となって取り組むことが大切である。

○市長

そのためには、成果を共有することが大切であり、教員が代わっても成果がでることが大切である。糸魚川独自の考え方を示し、システム化していく必要がある。

○教育長職務代理者

陰山メソッドは一つの自己鍛錬だと思う。自分の力を高めるために自分を励ましながら鍛錬する助けになることを期待したい。

社会、理科の落ち込みを懸念している。情報化社会が影響しているものと思うが、真面目な研究、探求の姿勢を小学校、中学校のうちに持たせなければならない。

情報化社会の中での社会、理科といった研究は現場でなされているのか。

○事務局

社会で言えば、授業が旧態依然として、暗記に頼る部分が大きく、子どもたちにとって面白くなく、子どもたちが主体的に考えたり、判断したりということが行われにくくなっている。理科は、例えば実験を系統的に学ぶことができているため、知識として身につかないことがあるように思う。授業改善が必要だと感じている。

○教育長職務代理者

その通りだと思うし、今後に期待したい

牧歌的、鋭角的という話があったが、通知表の表現について、小学校と中学校に大きな違いがあることも課題であり、問題提起としたい。

○委員

中学校の教員もしっかりした指導力を身につけるようにしてほしい。

○教育長

教員も研修を重ねており、チームで指導にあたることを基本にして、足並みをそろえ、子どもの立場に立って指導にあたるようお願いしていく。

○市長

学力向上については、今までの委員の発言をまとめて取り組んでいくことと、特に陰山メソッドの効果をさらに上げていくこと、また学校間での格差がないよう、お互いが情報交換をしながらレベルを上げていくシステムづくりをしていきたい。

続いて不登校対策を議事とする。事務局の説明を求める。

(2) 不登校対策について

資料No.3により事務局が説明

○教育長職務代理者

非常に深刻な状況であり、心配である。不登校が問題視されてから、年月が経過しているにも関わらず、数が増え続けている。

社会全体に起因する大きな問題があると思うが、文部科学省、新潟県の対策は効果があるのか。

○事務局

国立政策研究所の資料によると、小中の連携が功を奏すると言われている。

子どもたちが学校は楽しいと思わせるような取組みを小中連携で取り組むことが大切であると思っている。

また、子どもたちの自己有用感を育てることも大切で、国県の資料では規律、学力、有用感が大切となっている。

○教育長職務代理者

弱い状況に置かれている生徒が多く、人に何か言われると、閉じこもってしまうケースが多々あるように感じるし、人間関係が危うい状況にある。

集団生活する意義、意識を盛り立てるような状況にない子どもたちもおり、大多数がそうではない状況に安閑としている状況があるのではないかと。

不登校傾向にあったが、回復したという例がもっと明らかになってもよいと感じるし、深刻な問題である。

○市長

昨日今日始まったものではなく、長く続いている問題であり、体制を整えるなど対策を打ってきているが、一向になくならない。

原因が見えないが、体制が機能していないのではないかと。

早急に解決したいと思っているが、解決しなれば、生徒一人に一人が対応することも考える必要がある。

それでも解決しないなら、保護者とも話しをし、転校することも一つの方策であるし、市内で施設が空いてきており、専用の新たな場所をつくってもよいのではないかと。

徹底的な支援が必要である。

○事務局

昨年、教育委員の視察で不登校生徒が通うフリースクール「やすづか学園」を訪問した経緯もある。

現在、平成 28 年度に中学校で不登校となっている生徒 31 名のうち、半数が起立性調節障害という診断を受けている。

診断を受けることで、保護者も病気だから、学校も病気なので強く登校を促せない、生徒本人も病気だから休むのが当然となっているのが実態である。

起立性調節障害で不登校になっている生徒の保護者に対し、医師等の専門家から対応方法を話してもらうことも考えている。

○市長

それも一つの対策だが、学校へ通っていないということは、将来的に社会へつながっていかず、確実に学力は低下するし、学校生活に後れをきたすことではいけない。

上越市に専門の施設があるなら、糸魚川市でもやるべきで、子どもたちに学習の機会を与えるべきである。

障害を乗り越えること、どこかで一線を乗り越えてもらうことを保護者としてしっかり話しをしなければならない。

糸魚川市ではどういったスタイルがいいのか考えること、また何としても対処しなければならない。

○教育長職務代理者

同感である。人間は一人で生きているわけではない。多かれ少なかれ、間違いなく社会というものを形成し生きている。

幼い時から対人関係が形成され、その中で人格形成されていく大前提にも関わらず、自分一人に閉じこもってしまうのは、成育歴、家庭教育という問題はあるかもしれないが、大前提を無視するのは、何でもありきとなり無謀である。

どうやったら自分と他者との関係を築いていけるのかを常々考えていかなければならない。

○委員

不登校への対応の仕方について、学校現場では専門的なカウンセリング、見取りがなかなかできず、一般的な対応になってしまう。

常々子ども一人ひとりに寄り添った適時適切な専門的な対応が大切だと考えてきた。

保護者も子どもへの対応の仕方がわからないのではないか。子どもの言いなりになることが子どもを守ることだと思っていると、不登校が継続してしまう。

学校では、機会をとらえて対応しているが、解決には至らない場合がある。

専門家のチームによる、居場所づくり、関係づくりから始めないと解決していかない。

市でも、ひすいルームをはじめとした体制、環境を何年も前から整備してはいるが、効果がなかなか表れないので、それに替わる新たな手を打つ必要がある。

状況は生徒一人ひとり違っており、ケースを分析し、本人、保護者と状況に応じた専門家と居場所で今後の見通しを相談していく時期に来ていると思っている。

○市長

今まで対応してきたことが功を奏していないということではないが、数字が示すとおり、今までのやり方では通用しないということである。

施設も大切だが、スタッフも含めて急いで対応するべきである。教員の負担、他生徒への影響も考えれば急いで対応したい。

数字だけでは判断できないかもしれないが、不登校がゼロではないので具体的な形をつく

っていく時期だと思う。

○教育長職務代理者

人間は巣籠り型の動物である。生まれてすぐに巣立ち、食物を口に作る巣離れ型の動物もいるが、人間は長い間、母親から授乳を受けたり、親から知恵を授けられたり、一定の時期を経て一人前になっていく。そういったことが忘れられているのではないか。

それをカバーするのが家庭教育である。家庭が子どもの生育に大きく関わってくるということを再度見直し、取り組み直すところにきている。

即効性はないが、長い目で見たときに今取り組まなければならない。

もう一点は、今は依存社会であり、福祉が充実すれば依存性が高まるのは当然で、限度を持たないと自立を阻害してしまう。

○委員

不登校の生徒の新たな居場所づくりはいいことであるが、不登校を生まない取り組みも必要である。それには、特別活動、道徳の充実が大事になってくる。

小学校での特別活動、道徳への取り組み方が非常に大切であると感じている。

○市長

家庭教育は大切だと思っている。不登校が無くならない現状で、もっと積極的に家庭教育に取り組んでいく必要がある。

いろいろなことをやらなければならないし、対処法だけでは済まない。

しかし、起きている現状を考えた時に、不登校生徒はもちろん、まわりの保護者、教員、同じクラスの生徒は皆不幸であり、決してプラスではない。

放置しておいてよいのかということであり、どうすべきか早急に考えるということである。

私の言うことは究極かもしれないが、やらないといつまでも無くならないし、危機的状況であると捉えている。

○教育長

市長からマンパワーという話もあったが、学校では個々の事例に沿って、教員、相談員が対応している。

まだまだ足りないというところが数字に表れているので、スクールカウンセラー、相談員が張り付いて対応できる体制をつくっていききたい。

○市長

もっときめ細かい対応をしていかなければならない。

不登校が子どもにとって一番かわいそうなことだと思っているので、不登校対策を最優先事項に考えていききたいし、次回に対応策を再度皆さんと考えたい。

4 今後の日程

○事務局

事務局としては、次回11月頃を予定しているので、日程調整させていただきたい。

○市長

今日の課題については、教育委員会会議の中でも協議してほしい。

(閉会 16:00)